

月と歩む

旭川市立光陽中学校 二年 相澤 結星

私が初めて生理の存在を知ったのは小学四年生の頃。保健の授業の時、男女に分けられて、女子は生理の説明を受けた。男女に分けられるなんて初めてのことで、みんながそわそわしていたのをよく覚えている。

今でこそ学校で男女ともに生理についての授業を受け、社会でも理解が進みつつあり、「生理休暇」という言葉もあるほどだが、母曰く、「生理休暇なんてママが若い頃はなかつたなあ」とのこと。では、もつと昔の古代日本では『生理』とはどんな存在だったのだろうか。

昨年、私は平安時代を舞台にした大河ドラマを見ていた。父と妹はさほど興味がなさそうで、母と二人で日曜日を楽しみにする毎日だったのだが、とある日曜日、その大河ドラマの中で、中宮が出産するシーンが描かれた話があつたのである。それがなんとも衝撃的だったのだ。主人公が中宮の出産に立ち会うのだが、集められた巫女たちが取り憑かれたように叫びだし、僧たちの怒号にも近い祈祷が響き渡り、

現代人の私たちにとって、カオスとしか言いようのない状況が繰り広げられていた。その後、中宮は無事に出産できたのだが、現代の出産の様子とあまりにも違います。本当にこんな異様なことがかつての日本で行われていたのかと衝撃を受けた。

この次の日、母が私にとあるネットの記事を見せてくれた。昨日の話はネットでそれなりの反響があつたようで、「まるでエクソシストだ」と話題になっていた。どうやら衝撃を受けたのは私たちだけではなかつたらしい。一通り記事に目を通し終え、ふとスマホの画面をスクロールしていると、とある関連記事が目に留まつた。その記事の内容は、平安時代において生理は穢れたものだとされていた、というものだつた。気になつてさらに調べてみると、生理期間中は祭祀に参加してはならないという規定が国で定められていたり、各地の神社で生理中の女性の参拝が禁じられたりしていたそうだ。さらに、生理期間中は家族とさえも隔離されて、月経小屋といふところに下がらなければならなかつたそうだ。

想像してみよう。明日学校に行つて、授業中、自分が生理になつたことに気付いたとしよう。そしたら、「穢れなので生理が終わるまで学校に来ないでね」と言われて

隔離されてしまうのだ。そんなの私だったらすごく悔しい。生理は女性が成長することにおいて当たり前のことなのだと教えてもらっていたので、今と昔の価値観の違いにものすごくショックを受けた。

私は、このことを知つてから時々、月を見上げると考えてしまう。月経小屋の中で長い七日間を過ごしたであろう平安の女性たちも、同じように月を眺めていたのだろうか。残念ながら当時は、まだ女性が筆をとり記録を残すことはほとんどなかつたため、資料もほとんど残っていない。そうだが、月が、大昔から同じつらさを抱えた女性たちが確かにいたことを教えてくれているような気がする。

月の満ち欠けの周期は月経の周期とほぼ同じなんだそうだ。私は今日も、まだまだ長い付き合いになりそうな生理と、月を見上げながら歩んでいく。